

第二期奈良県教育振興大綱総合的方針		一人ひとりの「学ぶ力」「生きる力」を育む「本人のための教育」を行う				総合評価
奈良の学び推進プラン		学ぶ意欲を喚起する 学びを継続する態度を身につける 学びを社会に生かす				
学校経営方針		人間力の向上 進路第一希望の実現				
昨年度の成果と課題		令和3年度本校教育のキーワード		具体的目標		A
<p>思考力・判断力・表現力等の能力を培う主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）を軸とした授業改善の取組、大学入試改革への対応、生徒会を中心とした生徒の主体的な活動、特別な支援を必要とする生徒への細やかな対応、地域との連携をはじめ、学校教育全般において所期の目標を達成することができた。</p> <p>その要因として、教職員のOJT、Off-JT、自己研修等への積極的な姿勢が、生徒の指導に対して良い影響を与えていると評価をいただいた。</p> <p>課題としては、授業の予習・復習の継続、学習と部活動との両立には生徒自身の強い意志が求められ、生徒の意欲をより高めるためにも日々の教育活動実践に研修の成果を反映させる更なる取組を推進を図る必要がある。</p> <p>また、前年度に引き続き、キャリア教育に関わって、進路実現に主体的かつ継続的に取り組む生徒の実践力を高める必要性があげられる。さらに、本校が緊急時の避難所となっていることを踏まえ、地域との連携の一層の強化も必要となる。</p> <p>本校では、将来の目標を見据えて、常に高い志をもって行動できる生徒の育成に重点を置いている。そのために、「挑戦～何度だって、また、やればいい～」を重点目標に、「環境」「行動」をキーワードとして、カリキュラムマネジメントの観点から、魅力ある学校づくりに努める。</p>		<h1>挑戦</h1> <p>～ 夢中になるものがある ～</p>		挑戦する意欲を喚起し、夢の実現に邁進する生徒に育てる。		
				「克己」の精神を身につけ、易きに流れず努力する姿勢を育てる。		
				「人権教育推進プラン」を踏まえた教育を推進し、互いを大切に作る人間関係を育む。		
				ダイバーシティの価値と個性の力を評価する。		
				自他の良さや可能性を認識し、努力や活躍を「誇る」「称える」文化を大切にする。		
<h1>可能性</h1> <h1>環境</h1>		挑戦を可能にする環境を整える。				
		人も環境であることを理解し、敬愛、礼節、尊厳、社会に役立つ視点を大切にする。				
	具体的目標	具体的方策・評価指標	自己評価結果	成果と課題（評価結果の分析）	改善方策等	学校関係者評価(結果・分析)及び改善方策
(1) 学校運営	夢中になるものを見つけ、意欲をもって学校生活に取り組み、挑戦し続ける生徒を育てる。	<p>昨年度の授業アンケートで「能動的に授業に取り組んでいる」と回答した生徒の割合が60%を超えた。この状況をさらに推進するため、主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）や反転学習の実践及び研究をすすめるとともに、双方向を意識したICT機器の効果的な活用等を実践することで、「能動的に授業と家庭学習に取り組む態度」を育成する。また、授業内容・展開に関する教科内での研究・協議、部活動と勉強についての達成感を高めるための学年内の研究・協議、観点別評価の効果的な運用の研究を活発に行うことで、教員が一層連携し、意欲的に生徒の指導・助言にあたる体制づくりを推進する。</p> <p>・授業アンケート（12月調査）において「受け身でなく能動的に授業に取り組んでいる」に肯定的な回答が62%以上、かつ橿高生活アンケート（年度末調査）において「部活動と勉強についての達成感」（10点満点）に5.0ポイント以上でA。</p> <p>・授業アンケート「受け身でなく能動的に授業に取り組んでいる」に肯定的な回答45%未満、かつ橿高生活アンケート「部活動と勉強についての達成感」が4.0ポイント未満でC。</p>	A	<p>新型コロナウイルス感染症の影響により、第2学期当初にMeetを利用した双方向型授業に取り組んだ。6日間の分散登校期間中、全てのクラスにおいて隔日でオンライン授業を行った。延べ、190回リアルタイムで配信授業を行うことができた。昨年度の400本以上の動画作成の経験と、Googleに関する臨時の職員研修、その他教員相互の協力により、教育を止めない活動を行うことができた。12月実施の授業アンケートにおいても、昨年度以上に肯定的な回答を得ることができている。「能動的に授業に取り組んでいる」に肯定的な回答は、昨年度の60.2%から、79.3%と飛躍的に上昇していたり、「この科目が好きである」54.2%に対して、「この授業内容に満足している」が74.1%と大きく上回っていることから、オンライン授業の弊害は見られなかったと言える。むしろ、その後の授業においてパワーポイント等を活用しての授業が増えたことが、生徒の満足度上昇に繋がったと考えられる。ただし、双方向型同時配信授業の運用については、今後クリアしていくべき課題があるが、次年度入学生からのBYOD活用に向けての早急な準備が必要である。</p> <p>橿高生活アンケートにおいて「部活動と勉強についての達成感」部活動は6.9ポイント、勉強は5.5ポイントであった。</p>	<p>授業アンケートから「授業満足度」が高かったことに対し、「学期はじめに比べて、この科目の興味・関心が高まった」が、59.8%と伸びが少なかったことから、第3学期には、生徒の科目に対する興味・関心を高める工夫、授業改善策を各教員が考え、実行することとした。</p> <p>オンライン授業やBYODに対応した授業改善に向けての対策として、観点別評価の本格運用と併せて、職員研修の実施と必要な情報の共有、また、本校が長年継続している「指導主事を招いての授業研究」に加え、教員相互の授業見学の機会を持つことにより、教員間の運用格差が出ないようにしていき、生徒の授業満足度の高水準を保つこと。そして、「科目への興味・関心」65%以上を目指す。</p> <p>また、部活動と勉強についての達成感を高めるため、「橿原高等学校の部活動に係る活動方針」を踏まえた効率的な部活動運営を一層推進するとともに、学年・教科での協議を活発に行い教員の一層の連携から、生徒の学習習慣の定着を目指した体制づくりを推進し、5.5ポイント以上を目指す。</p>	<p>・授業アンケートの結果からも、コロナ禍にもかかわらずオンライン授業を効果的に実施するなど、教育を止めない活動ができたことは大いに評価できる。「withコロナ」の教育実践に向け心強い。</p> <p>・オンライン授業、リモート学習は不登校生との学力保証に効果的な可能性も考えられる。</p> <p>・橿原高校存続のためにも、他校にない特色ある学校作りをこれからも積極的に進めてほしい。</p>
	『学び続ける教員』としての自覚と実践を促すとともに、『「挑戦し続ける生徒」のサポートができる教員』のための研修を推進する。	<p>教職員が、OJT、OFF-JT及び自主研修の機会を生かし、その研修の成果を学年、分掌、教科等で共有できる状況をつくる。とりわけ、ICT活用、キャリア教育、生徒指導、人権教育、教育相談、アレルギー対応等の今日的課題に対する研修に加え、学校行事（特に修学旅行での感染症発生時対応）についても、対応マニュアルや緊急対応マニュアルを作成し、適切に対応するための事前研修を行う。</p> <p>・教職員一人当たり6回以上かつ延べ450回以上の研修に参加でA。3回未満かつ200回未満の参加でC。</p>	A	<p>校内研修としては、「内部統制制度研修」「アレルギー緊急時対応」「Googlemeet等活用」「令和3年度観点別学習評価」「令和4年度観点別学習評価に向けて」「人権教育学年別研修」「学年別進路研修」や、SCによる「子どものSOSを受け止めるために」活用研修等についての研修を実施。また、各教科「指導主事を招いての授業研究」や「放送教育研究大会発表」による授業研究と発表、研究協議を通じた研修を行った。コロナ禍により教育研究所や実施場所に赴いての研修が少なかったが、リモート研修が増加した分、校内で効率よく研修が受講できたり、同じ研修を複数人で受講できるなどのメリットもあった。また、リモート研修への各自の参加対応はこれまでの研修等で十分対応できている。</p> <p>課題としては、実施会場での他の受講生との交流が少なかったり、現地での雰囲気を感じる事が難しかったことが挙げられる。</p> <p>教職員の研修回数は、延べ494回であった。</p> <p>マニュアル作成については、「県教育委員会からの新型コロナウイルス感染症対応マニュアルを基にした各種マニュアル87ローチャート」「各種防災関係マニュアル」「アレルギー緊急時対応マニュアル」「緊急連絡（電話対応）マニュアル」等のマニュアルを各分掌長を中心に作成した。</p>	<p>コロナ禍の影響によるリモート研修が今後も実施されることが予想されることから、研修に集中できる環境整備と減少している研修場所での研修への参加について、十分な配慮を行う。研修への参加状況は、今年度と同様に教職員一人当たり6回以上かつ延べ450回以上の参加を目指す。</p> <p>令和4年度入学生から適応される「観点別学習状況評価」「BYOD活用」の実施に向けて、これらに関係する本校としての実施体制の明確化と、実施に向けての研修と令和4年度内での実施状況の検証を行うこととする。</p>	

	業務改善を行い、教職員の働き方改革を推進する。また、教職員の意識改革を促す。	教職員が、健康でそれぞれの資質・能力を十分に発揮できるよう、分掌長等とも協力し、校務の適正な配分と効率化、全教職員の時間外従事時間の削減を図る。また、業務全般について関係職員がより一層協働して対応する体制をつくり、職場環境の改善を行い、健康障害の予防を図る。その際、働き方改革が生徒との関わり方と反比例しないように十分に留意する。 ・時間外勤務が、①1か月当たり80時間を超過、②1か月当たり45時間超過かつ3か月連続、③疲労の蓄積が認められる又は健康上の不安を有する、のいずれかに該当する教職員が0人でA。 ・ストレスチェック集団分析における本校の「総合健康リスク」が全国平均(90)以下でA。	A		教職員のストレスチェックの結果から、仕事の量的負担が全国平均値(100)に対し、111と高かった。ただ、職員の支援判定は89であり、総合健康リスクに99という評価であった。通常業務に加え、新型コロナウイルス感染症対応(オンライン授業・欠席、出席停止等の保護者連絡・消毒作業等)による教員への負担増が原因と考える。 時間外勤務については、①②③のいずれかに該当する教職員は0人であった。	教職員の適材適所の人員配置に努め、教職員間のコミュニケーションと報告・連絡・相談のしやすい職場環境づくりに取り組むこととする。 ストレスチェック集団分析における本校の「総合健康リスク」を全国平均90以下を目指す。 時間外勤務については、引き続き①1か月当たり80時間を超過、②1か月当たり45時間超過かつ3か月連続、③疲労の蓄積が認められる又は健康上の不安を有する、のいずれかに該当する教職員が0人を目指すこととし、毎月の勤務事態の把握を行うこととする。	
(2) 学習指導	時間の有効活用と授業における集中度を高める魅力ある授業を展開する。	部活動と学習のけじめを意識的につけさせ、限りある時間を有効活用させる。 ・授業アンケートにおいて「集中して授業に取り組んでいる」が80%以上でA、60%未満でC。	B	A	授業アンケートにおいて、「集中して授業に取り組んでいる」と答えた生徒の割合は75.8%であった。生徒は概ね授業に集中して取り組んでいるが、授業内容を十分理解できず、集中できていない生徒が全くないとはいえない現状である。	身近な話題や将来につながるテーマを取り入れ、アクティブラーニングなど生徒達が積極的に取り組める授業を作る。また、考査等で不振だった生徒に対して、積極的に補充を行い、クラス全体の学力の底上げを図っていかねばならない。	・学習指導についての日々の実践をこれからも粘り強く継続していただきたい。 ・主体的・対話的で深い学びの実現に向けて授業のさらなる工夫をおこなってほしい。
	家庭学習を促進する。(平日の家庭学習時間1時間未満の生徒を減らす)	学校での授業を大切にさせるとともに、家庭学習の重要性を認識させ、「予習→授業→復習」の学習サイクルを定着させる。 ・榎高生活アンケートにおいて「平日の家庭学習時間が1時間未満」が25%以下でA、50%を超えるとC。	A		日々の学習においては課題や小テストを実施。長期休業中には、毎日の学習状況を書き込むしおり等を作成し家庭学習を促すとともに、将来の進路実現に向けて、学習することの重要性を伝えている。(アンケート終了後、結果を反映させます。)	生徒自ら主体的に学習に取り組むための動機付けとして、将来の進路実現に向けて必要な力を得るための情報発信を積極的に行う。また、家庭学習を充実させるため、学校と保護者の協力関係をより強固なものにしていかねばならない。	
(3) 生徒指導 生徒会 教育相談	生徒の基本的な生活習慣を確立させることから、克己の精神を育む。	ルールやマナーの呼びかけを各クラスで実施。学期に1回生活委員による挨拶運動を実施し、その期間以外での校門指導も実施。 ・榎高生活アンケートで「あなたは校則やルールをしっかり守れましたか」という項目が9.0ポイント以上でA、8.0ポイント未満でC。	C	B	学期に1回は生活委員による立哨指導を行い、登校時の生徒の様子を指導してきた。 ルールやマナーの呼びかけを各クラスで展開していただきある一定の指導はできた。	年々、規範意識の低さが目立つようになってきている。善悪の判断や自分の行動面を見直すことができるように各クラスで展開していく。 スマートフォンや情報機器のルール作りも進めていく必要がある。 行事がなくなったときに、行事に変わる何かを今後検討していく必要がある。(今、できる範囲で最大限のこと) カウンセラーとの連携は特定の生徒・保護者・教員だけではなく、幅広く連携していく必要がある。	・「数年前よりも来校者に対しての挨拶が少なく感じる」という意見がある一方、「登校途中、交差点での榎高生姿は立派であり、挨拶も的確、若者の良さをいつも感じる」とお褒めの言葉もいただいている。 ・コロナ禍で様々な行事が思うようにいかない中、生徒がより満足感を味わえるよう、行事に変わる何かを早急に検討してほしい。 ・不登校や支援を必要とする生徒が増加していることの分析と研修の充実を期待する。
	生徒が主体的に学校生活を構築して、社会貢献に努める姿勢を醸成する。	生徒会活動の充実。部活動の積極的参加を促す。行事成功を目指し、先生方との連携を図る。 ・保護者アンケートで、「学校の雰囲気がよく、生徒が生き生きとしている」「ホームルーム活動や生徒会活動が活発で、社会性や人間力の向上に努めている」の2項目について、肯定的な回答の割合が9割以上でA、7割未満でC。	B		生徒会活動は、新型コロナウイルス感染症の関係で思うように行事ごとが遂行できないことが多々あり、生徒も不完全燃焼であった。各部活動積極的に活動していた。		
	生徒支援・教育相談体制の充実に努める。	スクールカウンセラーを設置する。生徒・保護者理解に努め、連絡を密にとる。また、関係機関との連携も密にとる。 ・保護者アンケートで、「学校の教職員は生徒理解に努め、生活指導面にも熱心である」について、肯定的な回答の割合が9割以上でA、7割未満でC。	B		担任の先生・学年の先生方が連携して、生徒の指導にあたってくださっている。また、カウンセラー・保護者とも連携し、生徒の現状把握や指導にあたってくださっている。		
(4) 進路指導 キャリア教育	主体的・能動的に活動する生徒を育成し、学力向上を図ること、進路第一希望の実現を目指す。	進路だより「Will」を各学期学年毎に1回以上発行し、配布時に担任が具体的な説明を加える。保護者に対して三者面談の際に資料を用意して情報提供に努める。進路対策のための充実講座を実施する。 ・榎高生活アンケートで、3年生徒の進路決定先満足度が70%以上かつ3年生保護者の学校の進路実現に対する指導の満足度が70%以上でA、生徒の満足度が40%未満かつ保護者の満足度が40%未満でC。	A	A	進路だより「Will」は、定期考査後、三者面談時、共通テスト直前等の時期に合わせて発行し、それらの内容について具体的に説明を加えることとした。進路対策のための充実講座を実施する。生徒・保護者に対して進路情報誌や各種プリントを適切な時期に配布したり、各種講演会等を実施することで最新の情報を提供することに努めた。進路実現対策として、充実講座や大学ミニ講義(榎高大学)を実施した。	各種進路提供の関する情報について、生徒・保護者のニーズに注視しつつ、タイムリーで適切な内容を提示する必要がある。最新の全国進路動向はもちろんのこと、本校の過去実績データ等を基に、様々な角度から進路情報を提供する必要がある。また、榎高大学を機に、生徒の主体的かつ能動的な活動(OPCや講義体験等)への参加を促し、何事も目的意識をもって行動することが肝要であることを認識させる。自己の活動記録(CP等)を活用することで、地域・学校・家庭における日常生活の中での学習の取組に見通しを立て、振り返りを行いながら、将来の生き方・在り方を考えられるように働きかける。	
	キャリア教育の視点に立って、生徒自らが可能性を広げようと努力し、何事にも積極的に挑戦することで、将来、社会で活躍できる人材育成を目指す。	総合的な探究の時間、LHR、放課後に進路講演会や各種ガイダンス等を実施する。教員が研修会に積極的に参加し、またインターネット等を通して情報収集をはかり、生徒、保護者に的確な進路情報の提供を行う。 ・榎高生活アンケートで、3年生徒の満足度が70%以上かつ3年生保護者の満足度が70%以上でA、生徒の満足度が40%未満かつ保護者の満足度が40%未満でC。	A		総合的な探究の時間(DS)やLHR、進路講演会や各種ガイダンス等で進路分野に関する内容を実施した。コロナ禍もあり、教員がWEB研修会に参加したり、ネット等を通して情報収集をはかり、生徒・保護者に的確な進路情報の提供を行うように努めた。		
(5) 人権教育	「人権教育推進プラン」を踏まえて、人権HRで参加体験型学習をより充実させる。人権講演会を実施して、多様な人々の思いや願いを理解するとともに、自分の命も他人の命も大切にできる生徒を育てる。	各学年の人権教育HRで従来のものに加えて、新たな資料を取り入れていく。外部講師を招いての人権講演会を実施する。 ・3年生人権学習アンケートで「各人権問題の解決は自分の意識や生き方と深く関わっていると思う」との回答の平均が75%以上でA、50%未満でC。	A	A	1年で高齢者に関する最新資料、2年で部落差別問題に関する県民意識調査結果、3年で労働者に関する厚生労働省の資料を新たに活用することができた。在日コリアンのちゃんへん.さんを招いての人権講演会を2部制で開催でき、生徒の人権意識を高めることができた。	①各学年の人権教育HRで生徒の人権意識をさらに高めるため、より具体的で時代に即応した内容を取り上げていく。 ②教員の人権意識向上のため、校内研修だけでなく校外研修にも積極的に参加してもらう。	
	教職員の校内及び校外での研修の機会と内容の充実を図り、それらを積極的に利用して人権感覚を磨き、生徒への指導に生かせるように努める。	全教員対象の校内研修を年1回、人権HR開催前の学年研修を各学期1~2回実施する。また、高人教等主催の校外研修に積極的に参加する。 ・全体研修に教員の80%以上が出席すればA。全体研修への教員の参加が60%未満でC。	B		「不登校傾向の生徒への対応」に関する全体研修を吉藤さんを講師に参加人数を制限して実施し、講演資料を全職員に配布した。高人教の研修会に数名が参加できた。		・人権感覚を研ぎ澄ますためには、人権に真摯に向き合う場や経験を持つことが大事である。リモートでは伝わりにくい部分もあるため、感染対策をとりながら、講師をお招きしての講演会を開催できたことは良かった。 ・新しい人権課題等、教員の人権意識を高めるための研修などをより充実させ、全教員が研修できるような工夫が必要である。

(6) 文化図書 教育	本を読む楽しさと文字に親しむ習慣を身につけ、豊かな感性と教養を育む。	週2回(各15分)のSSR(持続的黙読)を軸に、読書の楽しさと意義を実感し、生涯にわたって本に親しむ習慣を育てる。 ・榎高生活アンケートで「SSRについて」の満足度が6.5ポイント以上でA、5.0ポイント未満でC。	B	B	SSRと「榎高ER」(ER=Extensive Reading/多読)～「英語多読」の取組が、子供の読書活動優秀実践校として、文部科学大臣表彰を受賞した。	「英語ER」に関わる書籍の充実と管理について、英語科と協議し、次年度以降も継続的に事業を継続していきたい。	・英語多読の取り組みなど様々な取り組みを継続して実施して欲しい。
	文化活動を充実し、生徒の知性と創造力を育成し、協力を養う。	文化行事をとおして知的好奇心・創造力を育て、高校生としてふさわしい文化意識の獲得を目指す。学校全体の取組として、年間4回以上の文化行事等を実施する。 ・榎高生活アンケートで文化行事の満足度が6.5ポイント以上でA、5.0ポイント未満でC。	C		2021 kashiko expression of culture(10月)、校内読書感想文コンクール(9月)、朗読を聴く会(10月)、図書館文化講座(11月)、校内読書感想画コンクール(12月)を実施した。いずれの行事も生徒の創造性や知的好奇心の伸長につながった。	コロナ禍での行事内容の変更等は運営委員ならびに部員と迅速に対応する。	
(7) 体育 健康教育	全生徒が、充実した高校生活を送れるよう、健康・安全教育を推進する。また、体力の向上を更に図る。	学校保健委員会を開き、生徒の健康・体力の状況について実情を精査し、改善を図る。また、「保健だより」の発行により、生徒個々の健康に関する意識を高める。 ・体力テストの結果において、各学年男女別で全国平均を上回った場合A、3項目以下の場合C。	B	B	・「ほけんだより」を月1回発行することにより、生徒自身の健康面での自己管理を促した。特にコロナウイルス感染防止対策や熱中症予防対策などポスター掲示とともに情報提供に努めた。体力テストにおいては各学年男女とも全国平均と大幅な差異は無いが、握力・立ち幅跳び・反復横跳びがやや劣り、筋力・瞬発力の向上を図る必要があると考えられる。	・コロナウイルスの感染状況にもよるが、引き続き「ほけんだより」の発行により、生徒への注意喚起や感染予防に関する情報提供を続けていく。 ・体力テストの結果を踏まえ、体育実技および運動部活動においても全生徒の体力・筋力の向上が図れるようトレーニング法を研究・工夫していく。	・コロナ禍での感染防止対策として、「ほけんだより」の内容を充実させ、感染予防に関する情報提供を繰り返し行い、生徒の注意喚起を促し、クラスターを未然に防ぐことが即、教育活動の充実につながる。引き続きお願いしたい。 ・体育大会は子どもたちが大変楽しみにしている行事の一つである。工夫をこらしてできるだけ開催できるように努力してほしい。
	保健体育行事において、生徒が自主的かつ主体的に参加できるように工夫する。	体育委員会を活性化させる。 ・榎高生活アンケートで「球技大会」、「体育大会」「クロスカントリー大会」の3項目の満足度平均が6.0ポイント以上でA、4.0ポイント未満でC。	B		・コロナ禍の中での体育行事の実施内容について意見を求めた結果、各委員から工夫を凝らした意見が出されたのは良かったと思うが「球技大会」・「体育大会」では日程や実施場所・内容も変更となり、不満の声も聞かれた。反面、各行事の欠席者が例年よりも大幅に少なかったことは評価できる。	・コロナウイルスの感染状況にもよるが、体育委員をはじめとし生徒の意見や思いを、できる限り行事に反映させていく。	
(8) 環境整備 防災教育	学習に専念できるよう、生徒が自分たちの手で校内の美化ができる姿勢を養う。	環境整備委員による校内美化を啓発するポスター作りや、日常の清掃活動をととして生徒の美化意識を高める。 ・榎高生活アンケートで「校内環境美化につとめた」が6.0ポイント以上でA、5.0ポイント未満でC。	A	A	保護者アンケートより87%以上の保護者が環境美化、清掃が十分できていると評価している。大掃除では、まず身の回り(私物、机、イス、ロッカー)の整理から始めるよう計画したが、日頃から整理をする習慣へとつなげることができない生徒もいた。	校内外の美化意識を高める継続的な指導を行う。環境整備委員会活動の継続と活性化を図る。	・一斉防災訓練の実施や、防災・減災に向けた取り組みを行うことが重要であることに加えて、高校生は災害時に支援する側としての能力、体力を有すると考えられる。その自覚を促す視点も防災教育に取り入れていただきたい。
	震災、火災等に備えるための避難訓練などとして自らの身を守る行動の習得と防災に対する意識を高める。	生徒の防災意識を高める避難訓練・火災訓練を実施し、自らの身を守る行動を身につけさせるとともに防災意識を高める。 ・訓練実施後の生徒アンケートで「防災について理解できた」が70%以上でA、50%未満でC。	A		7月に地震災害を想定したシェイクアウト訓練を実施した。2月にパワーポイントを利用して放送で防災教育と火災避難訓練を実施した。	日頃からの防災意識を高めるため、避難訓練・シェイクアウト訓練に加えて、あらゆる機会をつかって防災、減災に向けた呼びかけを行っていく。	
(9) 国際理解教育	外国の文化への関心を高める。	外国文化への関心を高めるため、ホームルーム・集会・総合的な学習の時間の内容改善を図る。また、新聞を年間2回以上発行し、掲示板で情報発信を行う。 ・新聞の発行が2回以上でA、全く発行できなければC。		A	オンラインによる国際交流や、学年・教科・ALTと協力して台湾交流校へ手紙を送る取り組みを行うなど、昨年度に比べて内容改善を行うことができた。一方、新聞の発行時期が3学期に重なってしまった。来年度は時期を再検討したい。	年度当初により詳細な計画を立て、新聞の形式、内容、発行時期を見直す。	・全校生徒が卒業までに国際理解に関わる取り組みに参加できるように努力する。
(10) 学校評価 広報	本校独自の教育内容の構築に努めるため、学校評価システムの改善を図る。	生徒による授業アンケートを年2回、榎高生活アンケートを年1回、保護者によるアンケートを年1回実施する。 ・すべてのアンケートにおいて評価項目の見直しを図ることができればA。全く見直しができなければC。	B	A	来年度教育課程が大きく変わることも考慮しながら、各アンケートにおいて評価項目の見直しを図ったが、スクールミッションを踏まえたアンケートの検討をさらに進めていく必要がある。	過去のアンケート結果を精査し、顕著な違いが現れるものについて原因を明らかにし、新しい教育課程に準じて改善すべき点については具体策を検討する。	・中学校へ出張しての進路講演会など榎原高校の良さをリアルに伝えられる場を多く持てるようにする。 ・すべての部活動がHPで紹介されていないのは残念である。動画等も見れるように工夫すればより興味を引くと思われる。
	中学生やその保護者への広報活動を積極的に行う。	中学生やその保護者に本校の魅力を伝え、より多くの中学生が本校を志望するように、学校案内やホームページを活用し、広報内容の改善に努める。 ・ホームページ更新回数が70回以上でA、50回以下でC。	A		64の中学校に学校案内パンフレットを送付、進学説明会に5回参加した。生徒会、各部活動の協力を得て作成したe-オープンスクールは総アクセス数が2713件あった。ホームページは71回更新し、学校行事、クラブ活動等の情報発信に努めたが保護者アンケートの結果「本校のWebページをよく見る」のポイントが前年度より減少し、アンケート結果には反映されなかった。	中学生やその保護者、また本校の保護者が必要とする情報を的確に把握し、ホームページ等に反映させる。	
(11) 事務	普通教室(1)及び管理棟(2)屋上防水修繕工事を円滑に進める	教育活動への影響をできるだけ少なくし、また、工事が円滑に進捗するよう、関係機関と調整を行う。 ・工事が工期どおりに問題なく円滑に支障なく進んでいればA、調整可能ではあるが教育活動に何か支障があればB、工期が遅れるような大きな問題があればC。	A	A	屋上防水修繕工事は関係機関と工程会議等において連携を図ることにより教育活動への影響を最小限度にとどめて工事を進めることができた。教職員間の情報共有を行い、生徒に周知することで、事故もなく予定どおり工事を終了することができた。	今後も工事を行う場合は、生徒の安全安心を考え、教育活動への影響を最小限度にとどめることができるように調整して進めたい。	・今後も生徒の安全安心、教育活動への影響を第一に考える。
	令和2年度に導入された「内部統制制度」を全教職員に周知し、効率的に業務を行えるように努める。	「内部統制制度」の研修を毎年継続して行う。全教職員が「リスク回避実践チェックシート」を使ってリスクを回避し、効率的に業務が行えるように努める。 ・リスクの発生がなかった場合はA、リスクの発生はあったが、早期に見えられ、訂正された場合はB、重大なリスクが発生した場合はC。	A		「内部統制制度」の研修を6月の職員会議で行った。「リスク回避実践チェックシート」の提出が2月の予定なので、評価については未定。	内部統制制度の取り組みが継続できるように毎年研究を行うなど、方法を検討する。	

第1学年	基本的な生活習慣の確立と社会に貢献できる人間形成の育成に努める。	日常生活において、挨拶の習慣と正しいマナーを身に付けさせる。 ・年度末の学年総括で所属教員の70%以上ができていますと判断したらA、40%未満でC。	A	A	B	年度初めから、挨拶については自ら率先して行うことができた。2学期、3学期と時間が経ち、徐々に意識が薄れてきている場面もあるが、全体的によく実践できている。着衣のや頭髮の乱れもほとんどなく、落ち着いて過ごすことができています。	生活における基本的なことを継続して、全教員が協力して行っていく。	・登校時の様子は若者らしく挨拶も心地よい。ルールを守り清々しくさせてくれる朝の服の清涼剤がある。 さらに文武両道となれば申し分ない。粘り強く取り組んでいただきたい。
		日々の授業を大切に、予習・復習・課題提出などを確実に実行させる。 ・榎高生活アンケートにおいて、平日の学校外での学習時間が1時間以上とする生徒が70%以上でA、40%未満でC。	B			定期考査では部活動に入っている生徒が上位を占めていて、高いレベルでの文武両道が実践できている。しかし、考査前だけの学習で考査に臨む生徒もあり、予習と復習の徹底ができていない現状である。	集会などでの啓発、進路指導と絡めて、生徒たちの意欲を高めながら、文武両道の実践を指導する。	
	人としての美しい心を養い、寛容の精神をもって人と接する姿を身につける。 ・榎高生活アンケートにおいて「重点目標を達成しようと努力している」が70%以上でA、40%未満でC。	B	B			新型コロナウイルス感染症の影響もあり、制限のある中での学校生活ではあるが、その中でも互いを尊重しながら生活を送っている。来年度は中止になった行事も経験し、充実した学校生活を送れるようにしたい。	現状を悲観的にとらえるのではなく、今後につなげていくために、今は個人ができることを粘り強くやり抜くよう指導してゆく。	
第2学年	主体的な進路選択に取り組み、その実現に向け基本的な学力を身につける。	自ら進路を考え決めるための時間として、総合(未来探究)、ホームルーム、学年集会の指導内容について生徒の実情をよく把握した上で実施する。 ・2学期の模擬試験で80%以上の生徒が志望校をきちんと書ければA、50%未満でC。	A	B	B	学年集会やHR、講演会などで10時間以上の考える時間をもった。生徒の中にはまだ迷いがある生徒もいるが、2学期の模擬試験では、志望校をほぼ100%書くことができています。	生徒個々に応じた情報提供を行い、細かな指導を行う。授業の方法を精査し、生徒自身が授業の大切さに気づくことができるように工夫する。また、発展的な学習や課題、充実講座や模擬試験の復習などを家庭学習として習慣づけるよう強く指導する。	・生徒の数だけ生き方、人生があることをベースにそれぞれの目標を明確にし、実践に向けて努力することの大切さ、尊さを生徒自ら掴み取らせるための指導、助言や支援をコロナ禍の中でも期待します。 ・コロナ禍の影響を一番受けた学年である。できるだけ本来の高校生活に近い環境をお願いしたい。
		「予習・授業・復習」の習慣化と基礎学力の定着に取り組ませようホームルーム、各授業で声かけを続ける。 ・榎高生活アンケートにおいて、平日の学校外での学習時間が1時間以上とする生徒が、70%以上でA、40%未満でC。	B			各授業や家庭学習の時間の大切さを伝えてはいるが、まだまだ定着には至っていないと感じる。生徒の中には授業や課題より部活を優先する考えの生徒もおり、保護者が生徒任せの家庭も多い。しかし、意識の高い生徒も多くおり、放課後に残って勉強する生徒もいる。アンケート実施後、評価を行う。		
	生きる力と豊かな感性を磨く	部活動や修学旅行、体育大会・文化祭などの学校行事を通じて思いやりとお互いを尊重する心、他者に対する感謝の心を養う。 ・榎高生活アンケートで「重点目標を達成しようと努力している」が70%以上でA、40%未満でC。	A			A		
第3学年	生徒の決めた進路を実現させるため支援し、基礎および実践的な学力を身につけさせ、進路第一希望の実現ができるよう教科や各分掌と連携する。	高大接続改革による新しい受験制度と受験生の動向を把握し、個々の進路希望に応じた情報を提供する。そのため集会や情報誌配布を年間10回以上実施する。90%以上の生徒が志望を決め取り組んでいければA。	A	A	A	コロナ禍という状況が生徒、家庭の進路選択に大きく影響した。その中で学年集会や、情報誌配布を随時行い、受験の制度や動向について伝えた。ほとんどの生徒(90%以上)が、期日内に出願を終え、志望の実現に取り組んだ。	指定校推薦や公募推薦など秋入試を受験する生徒が全体の90%以上となり、11月などは受験や健康管理のために学校を休む生徒が増加した。本来は登校を促し指導すべきところであるが、コロナ禍を踏まえた新たな角度からの指導方法を検討する。また、授業への参加は進路実現への第一歩であるため、授業をより一層充実させる。	コロナ禍での制限された高校生活を余儀なくされている不幸な状況ではあるが、それを現実とポジティブにとらえて「withコロナ」の中で、より充実した教育実践の場となるよう、教職員、生徒がこれまで以上に一丸となって、信頼関係をより強く持って教育活動を営むことを望む。
		基礎および発展的な学力の習得を目指し、授業を大切にさせ、模擬試験のやり直しなどを徹底させる。進路実現に向け、授業、自宅学習を重視した生徒が80%以上でA。	B			授業への参加、授業の大切さを常に生徒に伝えた。模擬試験の一部が自宅受験となり、進学希望の生徒に緊張感ある実践の場を与えることが減ってしまった。充実講座への参加人数もコロナ感染への不安から数年前と比べ昨年と同様に少なかった。進路実現において重視した各項目の合計は64%。		
	豊かな感性を磨く。	自己の進路実現に向け努力するなかで、互いの努力に気を配り、進路実現を目指す雰囲気作りに取り組む。アンケートで、級友への手助けや生徒の雰囲気6点以上でA。  部活動や体育大会・文化祭などの学校行事を通じて思いやりとお互いを尊重する心と感謝する心を養う。 ・年度末の学年総括で所属教員の70%以上ができていますと判断したらA、40%未満でC。	A			A		